

秋

秋田大学

秋田大学

教育文化学部

- 人間環境課程
- 国際言語文化課程
- 地域科学課程
- 学校教育課程

医学部

- 保健学科
- 医学科

工学資源学部

- 土木環境工学科
- 電気電子工学科
- 機械工学科
- 情報工学科
- 材料工学科
- 生命化学科
- 環境応用化学科
- 地球資源学科



探

探る、探す。
私たちの未来。

力を加減していた。

アタリ

距離の自

視線

一投め強く投げた。

私はかき足定の距離。

医学部保健学科准教授

石川 隆 志

(作業療法学)

険しい坂道を登っている人がいる。坂の上から引っ張り上げるのではなく、横に寄り添い、共に歩く。相手が疲れたら、さりげなく支える。

作業療法士の姿を、石川はこう表現する。

様々な歩みを刻んで来た人たちが、心や体に何らかの「困難」を背負った時に、作業療法士は向き合う。

「人は元気だった時、若かった時の自分を『基準』にしてしまう。あれができない、これもできない。否定的になってしまう対象者と共に、いま持っている能力をどう活かしていくかを考えていく」と石川。いわゆるリハビリは、社会とのかかわりを再構築していく作業ともいえる。

授業を少しだけ、のぞいてみた。テーマは「作業分析学実習」。

指名された男子学生が2人、教室内でキャッチボール

を始めた。1球、2球、3球……。

石川が突然、学生たちに問う。「さあ、何を感じた」——。

「距離が近いので、手加減して投げていました」

「相手の胸をめがけて投げていました。キャッチボールの基本です」

学生たちが次々と手を挙げ、気づいたことを口にする。観察する力。様々な「視点」で身体の動きをとらえ、心の動きをも推測する。ジャージ姿の石川は、学生たちに語りかけながら、様々な言葉を引き出していく。学生たちがいつの日か、作業療法士として出会う対象者を意識しながらの実習。

「作業療法士が対象者と接するとき、当然ながら相手も観察していて、こちらを見定めています。どうやって関係を構築するか。技術・技能を磨くのと同時に、人間性も高めていかなければいけない。人と向き合うことは、難しいことですが、自分を成長させてくれる機会にもつながります」

「困難」の傍らに 寄り添う



石川が作業療法士となったのは30歳の時だ。働きながら学校に通い、資格を得た。病院でリハビリに従事した後、1992年、秋田大学に教員として着任した。

学生たちには、国家試験に合格するための知識を身につけてもらわなければいけない。一方で、資格を得ることだけでは人間的にもプロの作業療法士になれるわけでもない。対象者にも学び、悩み、苦しみながら経験を積み上げていく。

失敗や後悔、時にはそんなことも振り返りながら、学生との対話は進む。常に笑顔を保つ石川。でも、学生たちは「自分たちが何を考えているか、いつも見通されているようだ」と、ちょっぴり怖がっているらしい。

教壇に立つ石川。その姿を、日ごと鍛えられていく学生たちも懸命に「観察」している。その視線を、心地良く感じているようにも思える。

私の必需品



病院に勤務していた時、担当した患者さんからいただいたハガキ。右手を痛め、左手の能力を高めるために切り絵に取り組んだ人もいます。そんな切り絵を眺めていると、がんばろう、という気持ちにさせてくれます。

「高校生」の皆さんへ

がんばってもうまくいかないこともある。明解な答えがでないことや、マニュアルが作れないこともある。でも、そんなことにも向かって行ってほしい。



鵜飼 英美

医学部保健学科作業療法専攻

作業療法士は様々な人と出会える仕事で、その方達との出会いを通じて自分も成長できればうれしいです。将来は病院で働き、リハビリを支えていきたいと思っています。

『秘密』に迫る

医学部医学科教授 尾野 恭一 (細胞生理学)

心臓の細胞の動きを解析した紙が、研究室に貼ってあった。ふと、左胸に手を置いてしまう。自分自身の心臓がこんな風に動き、だから今も「生きて」いるのだと思うと不思議な気持ちになる。

研究室の「扉」を開けてみる。

心臓はなぜ、人の意思(頭)とは関係なく動くことができるのか。こんなテーマを尾野は追う。

「生」の象徴でもある心臓は、意思とは無関係に動いている。フランス革命後の恐怖政治にしばしば登場するギロチン。この処刑道具で、頭と胴体が切り離された後も心臓が動いていたという話を例に出し、尾野は説明する。

心臓にある「ペースメーカー細胞」。この筋状の細胞は自身で電気を発して拍動、心臓全体を動かしているのだという。拍動には「イオンチャンネル」というたんぱく質が

深くかかわっている。このたんぱく質が正常に動かないと、不整脈などの症状にもつながる。

ペースメーカー細胞を取り巻く世界が、尾野の探究心と並走する。

人がペースメーカー細胞を作ることができれば、病気の治療に生かすことにもつながる。さらには、人造心臓を作れる時代がくるかもしれない。大きな夢・目標を抱きながら、小さな細胞と向き合う日々が続く。

尾野はどうやって、自分のテーマに出会えたのか。

高校卒業時、医学部を進学先を選んだのは単純な動機だった。「医学部受験はハードルが高かった。でも、難しそうだったから、挑戦してみたかった」と尾野は言う。途方もない階段を昇っているような気がしたという医学部の6年を経て、尾野は麻酔科医として歩み始める。様々な専門がある中で、なぜ麻酔科医を選んだのか。「元々は救急医療をやりたかったので」と尾野は笑う。1kg未満の乳児から、100kgを超える関取まで。毎回、胃に穴が

心臓の



あきそうな気分になりながらも、麻酔科医としての生活は楽しかった。

臨床医から研究者に。転機は30歳の時のドイツ留学。どうして麻酔がかかるのかを知りたくて始めた研究だったが、その時の師が心臓の専門家だったことが、現在の専門に向き合うことに大きく影響した。

ドイツの暮らしは、余程楽しかったらしい。表情を一気に緩ませた後で、「外の世界をぜひ見て、異文化に触れて欲しい。必ず世界が開け、広がる」と話す。

振り返れば、周囲には常に、目標となる先輩や、刺激しあう仲間がいた。今はかなり「先輩」となってしまったはずだが、「研究に取り組む若者の仲間でありたいと思っている」と尾野。

研究室の机の上に、オニギリ1個。家から持参して水、木、金曜日の昼食はいつもこれ。月曜日と火曜日は、若き仲間たちと昼食を共にしている。

私の必需品



ガラス管。太さ1.1mmのストロー状。この先端を熱して尖らせ、顕微鏡を覗きながら細胞に突き刺して細胞が発生する電気信号を記録します。細かい作業で、失敗すると2度は使えません。1本約200円。学生には「10本使ったら、せめて2本は成功するように!」とっています。私自身は、イチローより高打率です。

「高校生」の皆さんへ

医学分野では、詰め込むべき内容は人間の限界を超えています。覚えるだけでなく、考えることが大切。丸暗記しなくても、その場で解決できる力をつけましょう。そのためには、まず本を読むことかな。



岡本 洋介

大学院生 医学系研究科細胞生理学講座

研究テーマは「不整脈が発生するメカニズム」についてです。誰も知らない事を最初に知れること。その発見が人の役に立てること。それが研究の魅力で、私は没頭しています。いろんな分野の専門家、患者さん。出会いの分だけ自分の選択肢も広がりました。医学部は人との出会いが多いことが魅力です。

明るく、楽しく。
共に生きる。



音楽コンビを結成した。長年の夢だった。「トシトランズ」というコンビ名も気に入っている。相手は障がいを持つ女性の父親。もう、20年来の付き合いだ。共にギターが得意だが、ギター2台はいらないと、笛を吹く役に回ることもある。ちょっと悔しい。

専門は障害児心理学。どことなく「重い」テーマと向き合う今野だが、会話の中には「楽しい」という言葉が頻繁に飛び出す。

「楽しさ」を説明するには、今野がサポーターを務めている「秋田すずめの会」抜きには語れない。秋田大学に着任したのが1980年。その5年後に立ち上げた、障がいがある人やその家族、そして学生たちが交流する会だ。学生の大半は教え子で、障害児教育選修に所属している。

発足当時、障がいがあるメンバーは5歳前後で、15人程だった。父親や母親もまだ若く、学生たちの年代にも近かった。

音楽、ゲーム、お祝いの会……。様々な催しを考えて、みんなで遊んだ。ボランティアという「肩に力を入れて、がんばっている」という負のイメージがあると今野は認めるが、すずめの会では「明るく、楽しくてもいいじゃないか」と皆が思い、実践した。

学生だけが支える立場なのではない。学生生活の間には、友人とけんかをしたり、ホームシックになったり、恋愛で悩んでいることもある。そんな時、頼りにしてくれている子供たちの存在が学生の支えになり、父母たちもさりげなく包み込んでくれていた。

障がいに対しても自然体。そんな親子の姿に触れることは、学生たちにとっても自分の親や、家族を考える機会につながっている。「教室とは違った姿を見せてくれる。『最近の学生は……』などと言われたりしているが、

おっとどっこい、やるもんだ、と思わせてくれるのがうれしい」と今野は話す。

大学の講義では、ビデオ教材を使って障がい児の行動分析をしたり、心理や発達の文献購読などを行う。障がいのある人やその家族が、話題を提供してくれることもある。教室でも今野は、学生たちが自分で問題意識を持つことが大切と考え、育てようと試みる。一つの行動や反応を例にして、学生が何を感じたのかを問う。ゼミ生の一人は「学生の見方を否定しない。その上で、新しい別の視点も教えてくれる」と話す。

すずめの会を立ち上げた時、今野や親たちは「いつか、子供たちも学生と同じ年頃になるんだね」と成長を願い、その日を楽しみにしていた。「夢のようにも思っていた」というその時期も、気がつけば当たり前のように迎えていた。

自閉症、知的障害、学習障害などの発達障害は、幼年期から青年期にかけての長期的な視点での支援が不可欠とされているが、今野たちは悩みもしたが明るく、駆け抜けるように時間と空間を共有していた。

マンネリを経験したことがない、という今野。「振り返るのには早いですが、こういう人生をおくれて良かった」と言った。

私の必需品



甘いモノ。自分でもあきれれるほどの甘党なんです。弁当を買いに行ってもつい、甘い物も買ってしまふ。学生にも知られていて、卒論に行き詰まった学生が「先生、大福食べますか」などと誘惑することもあるぐらいです。

「高校生」の皆さんへ

あなたの暮らす地域でも、障がいを持った人たちが暮らし、様々な団体に活動をしています。一步、踏み出してみませんか。思いがけない良い出会いが生まれ、視野が広がるはずですよ。



大桃彩香

学校教育課程 障害児教育選修

教科書で学ぶのは理論ですが、すずめの会の活動や実習を通じて、人は1人1人皆、違うのだということを感じています。人を受け入れていくことの大切さを感じています。

教育文化学部教授

今野和夫

(障害児心理学)

「生命」の力に触れて



夜明けのICU(集中治療室)。そこでは交通事故で頭を強打した2歳の女の子が、すでに1カ月以上、意識なく眠っていた。

長かった夜勤を間もなく終える佐々木は何気なく、ナースステーションにあったオルゴールのネジを巻いた。「ミッキーマウスのマーチ」が流れた。

何の前触れもなく、女の子の目が開いた。そして佐々木の動き、軽快なメロディーを追っていた。

20年以上前のこの場面を、佐々木は鮮明に思い出す。「女の子はその後、意識を取り戻しました。医学や看護の力を超えた『生命』の力だったのだと思います。人間のすごさ、素晴らしさ。生命の不思議。看護師になっていなければ、知る機会はなかったと思っています」

女の子はその後、退院。すでに成人式を終えている。佐々木は今、看護師を目指す学生たちに「基礎看護学」を教えている。医療現場で働くための膨大な知識、高度な専門技術。加えて看護師として知っておかなければならない看護の社会的な役割などについても学生に伝える。

講義だけでなく、医療の現場での実習も大切だ。学生たちは教科書を学ぶことの必要性を知り、教科書通りにはいかない世界も知る。

実習を佐々木は「自分のできなさを知る場所」といい、「それを認める強さを学ぶ場でもある」と話す。

医療の現場の過酷さは、人の喜怒哀楽が生死を伴う極限に存在することにもある。佐々木も多くの死を見守った。

医学部保健学科教授 佐々木 真紀子 (基礎看護学)

「看護師は、幾人もの患者さんを同時に担当します。患者さんが亡くなって茫然としていても、その次の瞬間には違う患者さんと向き合わなければいけない。その切り替えは、いつになっても難しい」

常に最善を尽くす。「その人が必要なもの」を懸命に探す。言葉で、仕草で、表情で。患者さんは様々なことを看護師に伝えている。そのメッセージに気がつくことができるかが、看護師には問われているという。

そんな過酷な現場で、佐々木たちは何を力に換えているのか。佐々木が知った「ありがとう」という言葉の素晴らしさ。患者さんによっては言葉で表現することが難しい人、心身に余裕のない人もいる。

「それでも一瞬の表情で伝わってくることがある。ふっと和らいだ表情に、この仕事を続けていて良かったと思う時があります」

佐々木のゼミで学ぶ斎藤宏美に会った。「同じ病気でも、患者さんは皆、違う。患者さんに何を話せばいいのか、わからない時もある。自分にできることは何なのか。実習ではいつも悩んでいました」と話す。

斎藤は国家試験を経て、千葉県内の病院に就職する。全国に散らばる、佐々木の「同僚」になる日も近い。

私の必需品



食べ終わったゼリーの容器と、広告の紙で作ったトンボの折り紙。10年以上も前、患者さんからいただいた物です。その患者さんは亡くなってしまったのですが、その方の思い出が詰まった宝物。研究室にずっと置いています。

「高校生」の皆さんへ

何でもいいのです。自分の打ち込めるものを探しましょう。何かに真剣になった経験は、他のことにも通じます。



池田 和人

医学部保健学科看護学専攻

今は国家試験に向けて勉強しています。教科書で学ぶことだけでなく、病院などでの実習で得たものが多いです。現場で患者さんたちと接していく中で、看護師は働きながら、自分も成長していける仕事だと感じています。



教育文化学部准教授

篠原 秀一

(地誌学・人文地理学)

インターネットで何でもわかるのか？

答えはNO。そこには、コンピューターに誰かが登録したことだけが載っている。コンピューターの世界でわかった気になっていた「現場」に足を運ぶ。街のざわめきを感じ、人の動きを追う。様々な暮らしの匂いや音までもが、現場にしかない臨場感を与えてくれる。教室で学んでいた知識が、瞬時に重みを増していく。

篠原が専門とする地誌学・地理学は、現場がなければ存在しない学問分野。研究室にこもっていても、前に進まない。地域を選んで入り込み、特性を嗅ぎ取っていく。

年に1度、約1週間。篠原は学生と共に地理調査の実習に赴く。三重、和歌山、高知……。参加者は現地集合。自分で交通手段を調べ、目的地に向かう。飛行機で行くのか、バスや普通列車を乗り継ぐのか。交通手段を選ぶだけで

はない。肝心なのは、誰に会って話を聞けばいいのか。どうすれば忙しい中、自分たちと会って話をしてくれるのか。秋田を離れる前の段階で、すでに「実習」は始まっている。

現地では「商業」「食文化」「景観・観光」などの班に分かれ、地形図・国土基本図等の地図を参照しながら歩き、自分の目で見て、そこに暮らす人たちに話を聴く。

メモの取り方。初対面の目上の人との話し方。場合によっては頭を下げたり、質問によっては怒鳴られたりもする。「駅前にコンビニがない。秋なのに、夜でも暑い。学生が『何だこりゃ』と思えば、そのすべてが収穫」と篠原は言う。

懸命に取り組んだ現場の経験は、学生たちに変化をもたらす。

「仮想や想像でなく、自分の見聞を重視する姿勢が生まれる。他の地域を見つめながら、自然と自分の暮らす地域と比較している。秋田への眼差しも変化している」と篠原。自分の力が試される現場。篠原にも失敗はある。



現場で 成長する 学生たち

大学院生だった時、静岡県伊豆下田に土地の利用状況を調べに行った。「何でもいから一つ、質問してこい」という指示を受けていた。ようやく一軒の文房具店に入り、とっさに尋ねたのが「国の減反政策をどうお考えですか?」。困惑した御主人の顔を覚えている。「尋ねる相手も内容も間違っている。もう少しまともな質問ができなかったのか……」。失敗も積み重ねれば、教訓や経験に変えることができる。

千葉県銚子漁港を調べていた、大学院時代の「経験」をもう一つ。どの範囲から水揚げ漁船がやって来るのか。地元の人には「全国から」と表現するが、まとまった資料はなかった。篠原は約1カ月かけ、漁協の一角で漁船ごとの水揚げ記録を手書きで書き写した。コピー機は使わなかった。

懸命に手作業を続ける篠原の姿勢を、1カ月、漁協の人たちは「観察」していた。そして、いつしか、記録には残していない「話」を伝えてくれるようになっていた。

私の必需品



ノート、カメラ、地形図。フィールド調査に必要なものです。ノートには調査の際に聞きとった内容を書くだけでなく、いただいた名刺なども貼り、それらが大切な研究の資料になります。

「高校生」の皆さんへ

自分の知的好奇心を大切にしましょう。今は自分の周囲の世界がすべてかもしれませんが、別の土地にはその暮らしがある。大学では本やテレビなどでしか知らない別の地域を、もっと深く知る機会が生まれます。楽しみにしていて下さい。



加藤 美理

教育文化学部 文化環境選修

教科書や本だけでなく、実際にフィールド調査を行うと、生きた情報を得られます。その土地に暮らす人の価値観、様々な思い……。直接感じられることは魅力です。

地球資源の
「可能性」を
求めて



パスポートの出入国スタンプが増えていく。この夏から秋にかけてオーストラリアに3度、ポーランドには2度。セルビアとパプアニューギニアにも行った。

世界各地の鉱山に立ち、柴山は「この先、本当にだいじょうぶなのだろうか」と思い悩む時がある。

2010年秋。外交の乱れによってハイテク製品に不可欠なレアアース(希土類)の入手が困難になり、希少金属類などを安定確保することの難しさと大切さを皆が知った。研究者の懸念は、ふとした拍子に現実となる。

一方で、鉱山は柴山にとって、巨大なエネルギーを感じる場でもある。大規模な現場では300tを超える鉱石を積んだ巨大なトラックが走り回り、採掘されたばかりの資源を運んでいる。パソコン、携帯電話、CDプレーヤー……。暮らしに当たり前のように存在する品々を支える金属資源は、こういった現場の地底から、人の手で運び出されたものだ。鉱山の荒々しい音と動きの中に、

工学資源学部教授

柴山 敦

(資源処理・リサイクル工学)

人々の暮らしを支える原点、そしてダイナミックさを感じるのだという。

駆け回るフィールド同様、柴山の専門領域は幅広い。

例えば、役割が終わった家電製品の基板などから、金属を効率良く回収して再利用する技術の研究。資源国ではなく、消費国の立場を逆手に取った「都市鉱山」を確立する取り組みといえる。しかし、回収・再利用(リサイクル)だけでは旺盛な工業需要に追いつかない。開発の遅れている資源国に赴き、いかに効率よく金属資源を生産できるかも考える。

開発と共に考えなければいけないのが「鉱害」の問題だ。「鉱山開発は、地球に負のダメージを与えるのは事実」と柴山は言うが、同時に「今は鉱害を防止する手立てがある。コストはかかるが、理解を求めていくことも大切な仕事」と続ける。

開発→鉱害防止→回収・再利用。一連の流れの中で、技術者でもあり研究者でもある立場には様々な角度から「責任」が付きまとう。

そして教育者の立場もある。柴山の研究室では現在、14人の学部生、大学院生がそれぞれのテーマに挑んでいる。教え子を「宝であり、良きパートナー」という柴山。学生たちには「世界を知らないと、物事は動かない。拠点は秋田に置いても、視線は世界に向けよう」と力説する。

柴山の研究室では実際に、学生たちが世界各地の現場に赴き、調査や研究を行っている。研究室で積み上げた知識や仮説を、現場で再確認する作業。現場を踏んだ学生たちは帰国後、顔を紅潮させて柴山に報告する。この「変化」が、柴山を元気にさせる。

九州で生まれ育った。大学院を卒業後、民間企業で1年間、リサイクルプラントの設計にかかわった。秋田大学に転じたのは2000年。この間、そして今も。常に専門性を高めたいと思い続けている。

私の必需品



この手帳を、肌身離さず持ち歩いています。気がついたことはすぐにメモ。いろいろと挟み込むので、だんだんと分厚くなってしまいます。

「高校生」の皆さんへ

トライすることです。世界に目を向ける姿勢を育てましょう。



芳賀 一寿

大学院生 工学資源学研究科 資源学専攻

「選鉱」という分野の研究をしています。簡単に言えば、宝物の入っている石、有害物質を含んだ石、ただの石などを選別する技術です。外国の鉱山でも研修して、自分の研究がどう資源につながっているのかも実感できました。

メカの動きを
「コントロール」
する



ドラえもんの研究が専門というわけではない。しかし、この「ロボット」が、大好きなたら焼きを食べすぎないようにするにはどうしたらいいのだろう……。そんな「空想」をすると、すぐに研究モードに入ってしまう。

人間が日々何気なく行っている「コントロール」する能力を、メカが自ら考え、むだなくさせられないものだろうか。どうすれば、目的通りにメカが動いてくれるのか。長縄が取り組む「制御工学」は、人の暮らしに密接に結びついている。

車の運転を例に考えてみる。時速60kmで走らせようという目標に、脳が足に「指令」をだし、アクセルを踏む。時に人はアクセルを踏み込み過ぎて加速をしてしまい、目標速度を超えてしまったら、慌ててアクセルを戻す。ガソリンをむだに使わず、最も効率的に時速60kmを出すには、どのようにアクセルを「コントロール」すればいいのだろう。この作業を人間ではなくメカが行う場合、

工学資源学部准教授

長縄 明大

(制御工学)

どんなふうに「コントロール」させればいいのか。人間の「脳」を、メカを操るコンピューターに置き換えて考える。

人が苦手な重いものを軽々持ち上げたり、ときに素早く動いたり。人間が作った機械はしばしば、人間ではできないことをやり遂げる。

しかし、長縄は言う。

「例えば熟練した職人さんの仕事。経験を積んだ匠の技には、数値を処理するコンピューターでは表せない「技能」が込められています。メカの動きを「コントロール」しているとき、人間のすごさを再認識することが多々あります」。

今、研究室には16人の学生・大学院生が所属する。学生たちはそれぞれのテーマに対して、数歩先の課題を出され、自分で考えることを仕掛けられる。そんな学生たちに長縄が求めるのは、自ら考えてきたことを、自分の言葉で説明できる力。

「学生から思いもよらぬ『言葉』が出てきたとき、この瞬間が、何ともいえないぐらいうれしい」。

岐阜県出身。高校時代は「数学の教師になりたかった」。数学の問題を解くことが好きでたまらなかった。でも、国語や社会は弱かった、という。大学入試は東京会場で臨んだため、秋田に来たのは合格後、下宿探しに来た時が初めてだった。

夜行列車に乗って遠く秋田にやって来た。不安でいっぱい。寂しくもなった。でも、良い仲間や先生に巡り合え、自分の仕事に出会うことができた。

毎日、朝7時過ぎには研究室に入り、気がつくとき真夜中。以前に比べて体力が落ちたと思うときもあるが、「コントロールすることのみで満足せず、世の中にない、新しいモータを作りたいと思っています」と長縄。

ますます時間が欲しい。制御工学の専門家のチャレンジ精神には「自らをコントロールする」ことができない。

私の必需品



おもちゃのロボット。メカは広い視野を持っていないと作るのは難しいが、どんな仕組みになっているか、どうしたらこんな風に動くのかと考えたとき、分解することもあります。そんなとき、たくさんの工夫に気づかされます。「出前講義」では、相棒として教壇に立ち、触れてもらい、楽しむことからメカについて語ります。

「高校生」の皆さんへ

色々なことに興味を持って下さい。そして、失敗を恐れず、チャレンジしましょう。



関 健史

大学院生 工学資源学研究科 生産・建設工学専攻
医療と工学を結びつける研究を続けたいと思っています。患者さんの負担を出来るだけ軽減できるような計測・制御システムを通じて、医師をサポートできれば、と思っています。



教育文化学部准教授
長谷川 章
(20世紀ロシア文学・文化論)

まずはロシアン・ジョークから。

「レジは熱いうちに打て」

情景を思い浮かべて、くすっと笑えただろうか。ロシアでは、買い物をした時に釣り銭を間違われることが珍しくないのだという。たいがい、お釣りが少ないことの方が多い。

「帰宅してから支払い金額に文句を言ってもしょうがない。その場で戦え」という教訓を含んだこのジョークでニヤリとするには、そんなロシアのお国事情を知らなければいけない。同時に「鉄は熱いうちに打て」という日本のことわざも知らなければいけない。

ロシアン・ジョークも教材の一つ。長谷川の専門は20世紀ロシア文学・文化論。SF風の本を書くモダニズム作家・ザミャチンの研究で知られる。

地震が怖い。「異文化」がぎっしりと詰まった長谷川の研究

室は、地震が来ると「倒壊」する恐れがある。3千冊を超える本、千本を超えるビデオやDVD。訪れる者には雑然と見えるが、「最低限の秩序は保っています」と長谷川。どこにどんな資料があるのかは、鍛え上げたカンでわかるのだという。この空間で長谷川は、腕組みをしたり、時にはニヤリとしてロシア文化の息づかいを探る。そして可能な限りロシアに飛び、五感を使って自分に引きつけていく。

ロシアの作家は名前が難しい。登場人物の名前を覚えるのも大変だ。なぜ、長谷川はロシアという国を選んだのだろうか。

大学を選ぶ際に長谷川は①何か外国のことを学びたい、と考えたのだという。②どうせやるなら、あんまり日本で知られていない国、と思い、たどり着いたのがロシア。「当時、この国には怖いというイメージがあって、評判も印象も悪かった。それがかえっておもしろく映ったのかもしれない」と振り返る。

長谷川は本に夢中になった。そして気がつくと、ロシア

「文化」の 息吹を探して



映画の世界にもフィールドが広がり、のめり込んでいく。「転機」は96年から約10カ月の留学。ロシア科学アカデミーの研究者としてロシア語に浸り、映画館に通った。ウォッカを飲み、秋田県人より酒に強い人たちの存在も知った。

ロシアでは長らく映画が娯楽の中心だった。映画でのセリフやフレーズが、日常の暮らしの中にとけ込んでいることも知った。例えば、前を歩いている知人にこっそりと近づき、真夏でも「今、零下、何度ですか?」と尋ねる。

これも「ああ、映画にあったな」と気がつくようになった。長谷川は教え子たちに言う。「一度旅行した、というだけの場所でもいい。世界のどこかに、愛着のある場所を作って欲しい」と。そうすることによって、どこに暮らしていても、自分の世界を広げていくことが可能だからだ。

長谷川の研究室はいつまで、人が入れるスペースが残っているのだろうか。今のペースで好奇心が続く限り、すぐにも満杯になってしまいそうな気配だ。

私の必需品



何気なく買ったDVDプレイヤーです。意外と安かったんですが、ロシア製DVDも観られるので、授業で重宝しています。

「高校生」の皆さんへ

大学生活を有意義に過ごせる方法の一つだけ紹介します。世界中のどこでもいいから、お気に入りの場所を設定。一人で勝手にそこの文化をどんどん勉強し、在学中に1度は行く。熱意しだいで一生、人生を楽しめる方法になるはずですよ。



齋藤 沙千奈

国際言語文化課程 欧米文化選修

長谷川先生のゼミで、ロシアを訪問しました。教科書や授業で習ったことを、自分の目で見て、実感できたのが収穫だった。冷たい国というロシアのイメージも、文化を知ると変わってきました。

工学の技術を 人の暮らしに

工学資源学部准教授
水戸部 一孝
(生体工学)

道路の片隅に、花が供えられている。この場所で誰かが、交通事故で命を失った証だ。全国の先頭を切って高齢化が進む秋田。県内では、お年寄りの交通事故が後を絶たない。

安全に渡れる、と思った道路が横断できない事実。齢を重ねることは、視覚や聴覚の衰えも伴うという現実。心身の衰えを自覚することは難しい。認めることは、さらに難しい。危険を疑似体験することで、お年寄りの交通事故を防げないだろうか。水戸部は研究で、そんなことを考えている。

「わたりジョーズ君」と名付けられた歩行環境シミュレーターを開発した。

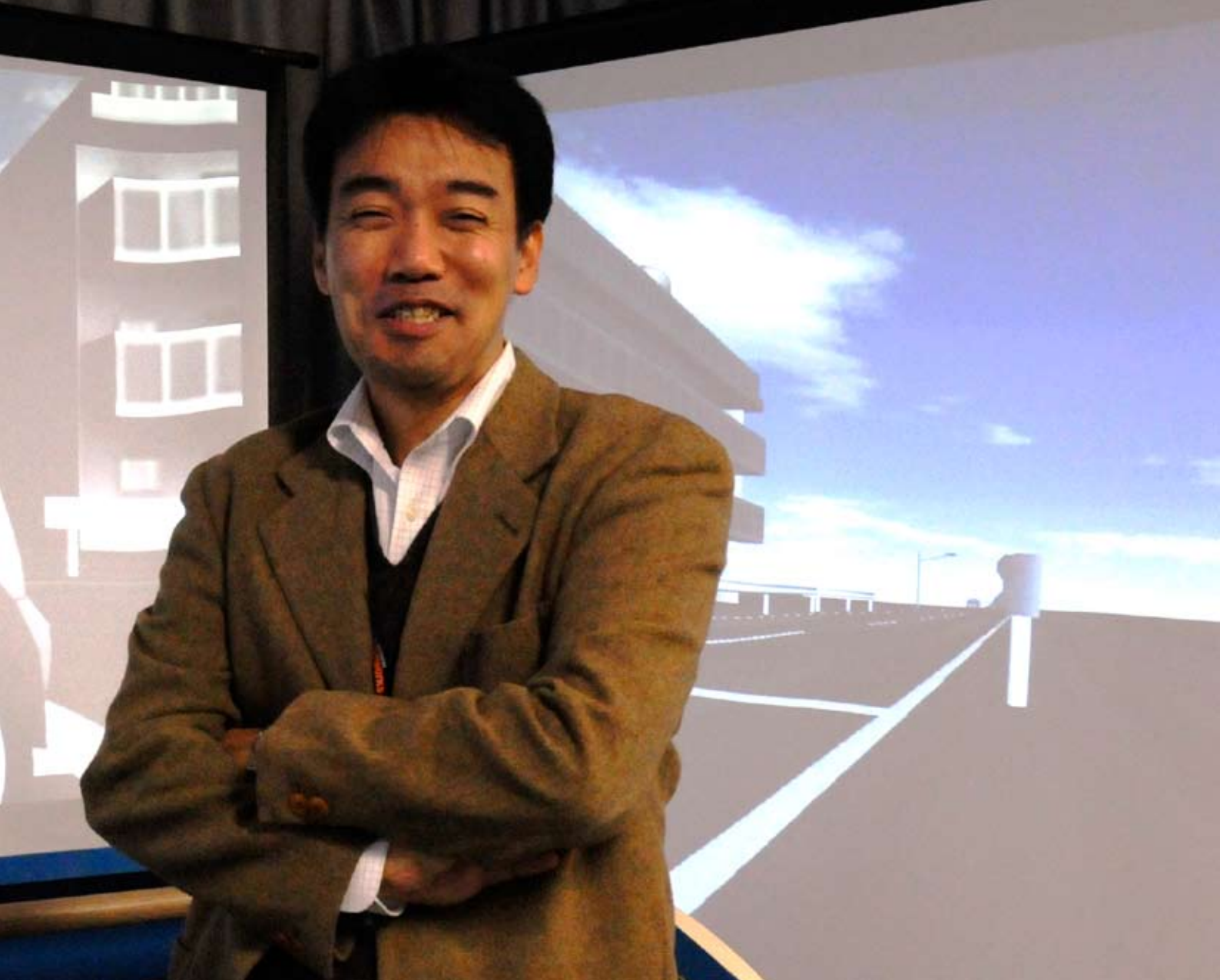
体験者の眼前には3面のスクリーン。コンピューターグラフィックの道路上を、次々と車が通過する。体験者

はルームランナーの上を歩き、道路の横断を試みる。無事に渡れるのか、事故にあう危険があるのか。その歩行の様子は、モーションキャプチャーと呼ばれる装置で記録され、安全確認の様子などが再現される。

予想以上に「ひかれてしまう」人が多い。各地で交通安全の講習会に呼ばれることが増えた水戸部は、データを見て「走行する車との距離感を的確に判断できていない」などと分析、お年寄りに注意を呼びかける。

生体工学。水戸部の専門は人間を工学的に調べ、人を支える技術につなげること。「電気電子」の技術はそのための手段といい、研究は「人」を見つめることから始める。交通事故の防止だけではない。高周波磁場を使ってガンの治療につなげることを医学部の医師と共に考えたり、卓越した職人やピアニストなどの「熟練の技」をモーションキャプチャーの技術で記録・分析したりもする。

水戸部が駆使する電気電子の先端技術は、軍事産業から派生したものが少なくない。命を奪うために生まれ



た技術は、視点を変えれば人を守ることに繋がられる。「将来は医師に」と考えたこともあった水戸部は、「人の命に直接向き合うのは重すぎる」と工学の道を選んだ。しかし研究生活を続けるうちに、別の角度から「人」と向き合うことになっていた。

水戸部の研究室では現在、18人が電気電子工学を通じて、人の暮らしを豊かにすることを考えている。メンバーのうち4人は中国、マレーシア、バングラデシュと外国籍。秋田大学でも有数の「多国籍軍」だ。

「自分だけのテーマを持つ」と、水戸部は呼びかける。失敗することも大切。「挑むべき課題が見つかるから」という。自分の師から受けた言葉を、後輩たちに繰り返す。2002年から約10カ月。水戸部は在外研究員として米国のマサチューセッツ工科大で生活。「自由に研究する楽しみ」を知った。留学当初は、コーヒーを頼むとコーラがでてきたこともあったが、帰国間際には好きなものが飲めるようになったという。

私の必需品



紙粘土で作ったXYZの座標系。これを使って人の体の動きや、磁場と電流の関係を説明します。毎年4月、学生たちと手作りします。上手に作る学生もいますが、そうでない人もいますね。

「高校生」の皆さんへ

どうして、なぜこうなっているのか。疑問を持つことが大切です。当たり前と思わずに、意味を考えてみる習慣をつけましょう。



富岡雅弘

電気電子工学科 電気エネルギー工学講座

工学の力を使って、病気の治療などに役立てないか、と考えています。大学院に進んで、さらに研究を続けます。



医学部医学科教授
山田 祐一郎
(内分泌・代謝・老年内科学)

おいしい漬物を毎食欠かさずに食べ、自慢の日本酒に酔い、名物の鍋はちょっと濃い目の味付け。歴史と風土が育んだ秋田の食文化の素晴らしさは、度が過ぎると危険……。健康を崩す要因は、常に「うまさ」の真横に位置している。

予備群を含めて約2210万人。臨床医、研究者、そして後輩・学生を育てる指導者。様々な立場で山田が挑む糖尿病は、最も身近になってしまった病気の一つ。患者個々の理由はあるが、根底にあるのは生活習慣によって起因する病気ということだ。

医師として、目の前にいる患者と向き合う。医学部附属病院で外来患者や入院患者は様々な症状を抱え、山田の治療に救いを求める。

研究者としては、長く「インクレチン」と呼ばれる消化

管ホルモンと糖尿病の関連を研究してきた。新しい糖尿病治療薬として注目されているインクレチンによる治療が確立すれば、従来の治療法が大きく変わるという。糖尿病患者にとっての「朗報」は、そんなに遠くない時期に届くかもしれない。

そして指導者の立場。山田は「医師が自分一人で行えることは少ない。次につなげていく人を育てていくことが大切」と話す。

一年のうち40週間は、医学部の5年生が2週間ずつ、20グループに分かれて山田の指導を受けている。同じことを20回繰り返すわけではない。個々の患者さんたちの状況にあわせて、的確な指導を心掛ける。「知識は教科書やコンピューターでも蓄積できる。その知識をどうやって使うかは、人間が考えるしかない」と学生たちに説く。

山田が気になることを指摘した。

秋田の子供たちは学力だけでなく、肥満の割合も全国的に見て上位に位置するのだという。

「健康長寿」 社会に向けて



「予備群」になるのをいかに防ぐか。今は自治体なども協力して、若い世代に食生活の見直し、改善を呼びかけている。元気に長生きする「健康寿命」を、いかに伸ばすかが課題だ。

「空いた時間はほとんどない」という山田。果たして、自分の健康は保たれているのだろうか？

「動き回っているから運動不足の心配はない。でも『健康的な生活か』と問われると……。早く良い薬でも見つけるしかないか」と笑う。そして「しんどそうに働くと、周囲にも伝染する。自分のやりたいことをやっているのだから、と常に自分に言い聞かせている」と続けた。

山田は秋田の味を「しょっぱい」と感じる関西の出身。米国留学などを経て、2006年から秋田大学で働いている。

教え子には「なぜこうなっているのか、常に考え続けて欲しい」と厳しさもみせるが、自身の医学生時代は「試験前は勉強したが、あとは遊んでいたかな」。ソフトテニスのクラブ活動にのめり込んでいたらしい。

私の必需品



音楽プレーヤー。私の研究室はあんまり外に音が漏れないので、昼間はクラシック、夜はポップスを聴いています。音楽が流れていると、かえって自分の世界に入り、集中できる。生活雑音が消えるからだと思います。

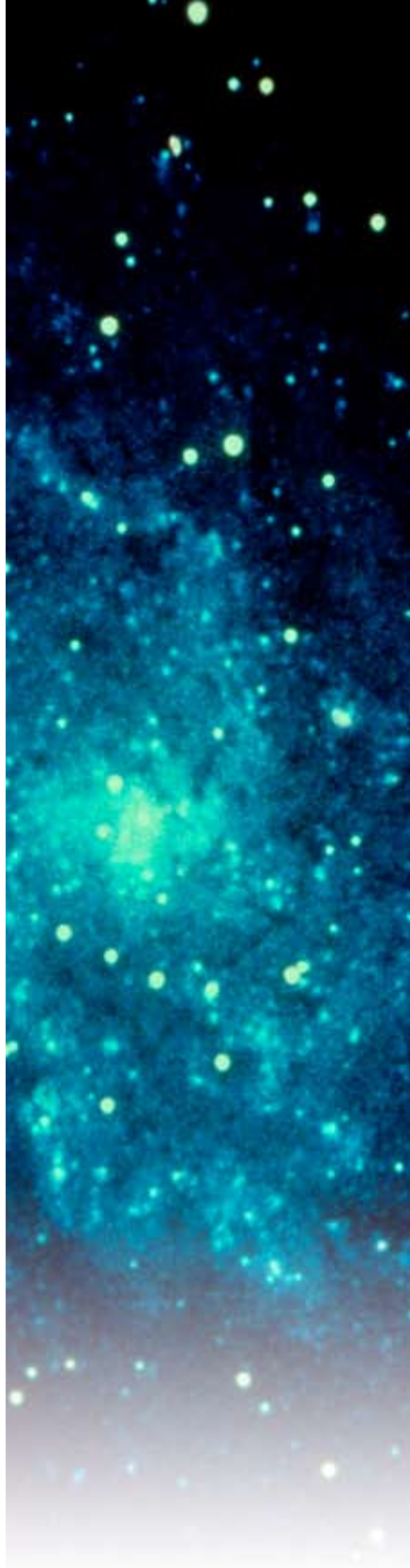
「高校生」の皆さんへ

医師になっても、今の医療は自分1人だけの世界ではない。看護師さんら様々な医療職種のメンバーでチームを組み、患者さんと向き合います。コミュニケーション能力を高めるように心掛けましょう。



菅沼由美

大学院生 内科学講座 内分泌・代謝・老年医学分野
医師になって8年目。現在は子育てしながら臨床と研究を続けています。人が健康に暮らすためにはどうすればいいのか。興味がつきません。子供との時間も大切、仕事も好き。バランスをとるのが難しいです。



秋田大学

〒010-8502 秋田市手形学園町1番1号 秋田大学入試課 TEL 018-889-2256

URL <http://www.akita-u.ac.jp/>



携帯電話
サイト



テレメール
資料請求は
こちら

題字:「探」/長沼 雅彦 筆 (教育文化学部 日本・アジア文化講座 教授)